



近頃は、蝉の声も少なくなつた
ようです。

「スーパード、かぶと虫が一
匹千円前後で売られているよ」

「ヘエーッ」

初めて聞いた時は、びっくりしたものでしたが、今では当たり前。ビニール袋に水と酸素を入れ、パンパンにふくらませた中に金魚を入れたのさえ、店頭に並ぶ所もあり、夏の風物詩も少しずつ、変化をみせているようです。

昔から、正月とお盆は、一年の中で一番長い休日であり、家族はじめ親族も集まって親交を深め、同じ釜の飯をいただきました。共同体を意識する大切な時でありました。特にお盆は、生きている人だけでなく、先に亡くなった御先祖様方を、仏壇から私達の居住区である座敷に招き入れる、特別な日でもありました。

ります。しかしその頑張りが高じて、自分の思い通りにならないと、怒ったり、乱暴な言葉を発して、母親と言い争いになることがあります。そうすると母親も、ついつい子供を叱るのに力が入り、子供に負けぬ汚い言葉を発することとなりまます。

すると孫は、自分の非を認め、いったんあやまるものの、「でもネ、かあか（母親のこと）も、オマエとか○○しろとか、悪い言葉を使つてたから、直した方がいいヨ」と説教するのだそうです。

勿論、言い争いは、第二回戦に突入です（笑）言葉はいつたん口に出すと、後戻りできません。

一時期、オアシス運動とかいって、「オハヨウゴザイマス」「アリガトウ」「シツレイシマス」「スイマセン」といった人間の潤いとなる言葉を見直そうという運動が

日常のひとこと

その一言に喜び、その一言に悲しむ。こ
とばは、人を、自分の人生を、あらぬ所に
運びます。

道元禅師は、菩薩道の一ツに「愛語」を
説かれています。

赤ちゃんをみるような思いで言葉がけをし
なさい。徳ある方はほめ、徳の無い人に対
しては、あわれみの心をもつて言葉がけを
しなさい。一と示されています。

日常、家庭の中では殆んど意識すること
なく、ポンポンと言葉が飛び出してしま
がちです。この言葉使い一ツで、家の中ひ
いては世の中が明るくもなり暗くもなるの
です。

またまた、私の孫の登場です。
五才になる反抗期まつただ中の孫。自分
の孫をほめるのは、いささか恥ずかしいの
ですが、結構、真面目で頑張りやさんであ

展開されたことがありました。ごくごくあ
たり前のことなのに、挨拶の言葉をかわし
合おうなどといったことをスローガンにし
なくてはならない程、残念ながら殺伐とし
た世の中になつていているということなのでし
よう。

横山大観画伯は、奥様が亡くなられた時
涙ながらに「生きている時、ひと言『ご苦
労さん』と言つてやりたかつた」と悔やま
れ、白木のお棺に観音様の像を描かれて、
別れを惜しまれたということでした。

人生には「四苦八苦」といって、いろいろ
な苦しみがありますが、八苦の中の一ツに
愛別離苦という苦しみがあります。
つまり愛する人と別れる苦しみ

のことです。

一諸行無常 会者常離一
しかし生あるものはみな、いつ
かは別れねばならないのです。



亡くなってからというよりは、横山画伯が後悔された「生きていた時に『ご苦労さん』と言ってやりたかった」という気持ちを大切にしたいものです。

言葉の浄化ということと共に、日常のひとことの大切さを痛感しています。

― 日常の五心 ―

- 一、 すいませんという 反省の心
- 一、 はいという 素直な心
- 一、 おかげさまという 謙虚な心
- 一、 私がしますという 奉仕の心
- 一、 ありがとうという 感謝の心

私信

御存じの方も多いと思いますが、私には五人の娘がいます。久方振りに姉妹で一緒に写真を撮ろうと話が決まり、緑色を使った服を各々持参するという決め事をして

自分が生きている―生かされている―それぞれの時をそのまま受け入れ、自然に流れていくという気持ちで精一杯生きる以外、手はないと思えた時、大らかに生きていくのでしよう。

一口伝導板

○人間は
耳が二つに 口一つ
多く聞いて 少し言うため



お寺から

「宝物庫」完成

何年前かに、蔵にしまわれていた文化財級の寺宝を虫干しも兼ねて、一般公開をしたことがあります。

その時には朝日新聞やポスト誌などの掲載効果もあつて、三日間の開催期間中に、千名余の方々が閲覧におみえにられました。

撮影会が行われました。

その時の写真が出来、今、私が仕事をしている部屋には、妻がそれらの写真をベタベタと貼り巡らしているの、賑やかなこと、この上もありません。長女、次女、三女、四女共に四十才を越え、五人で肩を抱き合つてポーズを撮つた写真に、成長した姿を見、感無量の思いがします。

若い頃は、生きていく以上、何かしななければその甲斐がないとか、何か目的をもつて生きなければ意味がないという思い込みから、自分の思い通りにならぬ日々、すつきりしないものを感じたり、生きることが難しいナアと嘆息したこともありました。しかし老いを迎え、後ろから数えてあと何年残っているやらと思う時、「人生は一本道」―どの様なことでも、自分でそれをしていく限り、それは自分の命の歩みだと思ひ至ります。

しかしその後、猛烈な台風で蔵の土壁が崩落し、中にある竹のしんが見えるなど修理を余儀なくされました。

その間、仲安真康という国立博物館に、その作品の何点かが収納されている鎌倉時代の有名な絵師の手による、十三仏のうちの薬師如来像の掛軸等、何点もの重物もみつかると、火災や盗難からそれらを守るべき建物の構築が不可欠となりました。

このたび機が熟し、三竹にお住まいの杉山精一氏のお声がかかり、宝物庫が無事に完成致しました。

誠に嬉しく思っています。ありがとうございます。


